

トンボ

トンボは、たいていは幼虫が生息する堀、川、池などの水気の多い場所で見られる。しかし、草原や森、山の頂上付近でもトンボの成虫を見ることができ、これらの環境は水辺同様にトンボのライフサイクルにおいて重要なものである。種によって、羽化したばかりのトンボが一時的に数週間水辺から離れるものや、完全に水辺から離れて繁殖期にだけ戻ってくるものがある。

様々な種が好む多様性のある環境も相まって、三瓶山周辺では多くの場所でトンボを見つけることができる。川を好むトンボは、川岸が葉で覆われた冷たく流れの早い小川でよく見られる。幼虫は岩の下に隠れ川底に生息する。トンボの成長期に水が張られる水田は「赤トンボ」と呼ばれるアカネ属が好む生息地だ。アキアカネは7月に羽化し、三瓶山の草が茂る山頂付近へと移住する。秋には交尾・産卵のために生まれた場所に戻り、その体は明るい赤に色を変える。

道路や草原の周りでは、日本で最大のトンボ種であるオニヤンマが見られることもある。この種は7月から10月の間に道路と川辺の間を飛び回っている。同じ地域で秋に見られる種にオオアオイトトンボがある。光沢のある緑色の体と大きな緑色の目が特徴的なトンボである。

成虫になると、多くのトンボはその季節のうちしか生きられず、冬までに死ぬ。三瓶山で一年中見られるトンボの種がひとつある。ホソミオツネトンボは越冬し、春に繁殖期を迎える。これが日本名ホソミオツネトンボ（「新年を迎える細い体のトンボ」）の由来である。